

中国語を母語とする日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-25 キーワード: 作成者: 鄭, 穎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2115

博士學位論文

内容の要旨及び論文審査結果の要旨

第 66 号

2023年3月

武蔵野大学大学院

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、
2023 年 3 月 17 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の
結果の要旨を収録したものである。

目 次

氏 名	学位記番号	学位の種類	論 文 題 目	(頁)
鄭 穎	博士甲 66 号	博士 (文学)	中国語を母語とする日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出	… 1

氏名	鄭 穎
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第66号
学位授与の日付	2023年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	中国語を母語とする日本語学習者による 終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出
論文審査委員	主 査 武蔵野大学 教授 欒 殿武 副 査 武蔵野大学 教授・指導教員 向山 陽子 副 査 武蔵野大学 教授 岩田 夏穂 副 査 元昭和女子大学 教授 横山 紀子

論文内容の要旨

執筆者：論文著者

1. 研究の背景

本研究は外国語環境で学ぶ中国語を母語とする日本語学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出に焦点をあてて、終助詞の機能という観点から学習者の発話意図の伝達能力を検討することを目的とする。発話意図を伝達するために学習者が終助詞のイントネーションをどのように産出するのかを検討し、学習者のコミュニケーション能力の向上に資する音声指導のあり方に示唆を与えることを目指す。

音声コミュニケーションにおいては、文字にできる言語情報と文字にできない発話意図や心的態度といったパラ言語情報が伝達される。パラ言語情報はアクセントやイントネーションなどの韻律的特徴によって伝達されるが、日本語特有のモダリティである終助詞もパラ言語情報の伝達に深く関わっている。

終助詞は発話の主観性を表すモダリティであり、本研究が分析対象とする「ね」「よ」「よね」は複数のコミュニケーション機能を持っている。そのため、これらの終助詞を使用することで話し手の勧誘、禁止、願望、疑問などの発話意図が聞き手に伝達されるが、それらの発話意図を的確に伝達するためには適切なイントネーションの産出が必要となる。また、アクセントやイントネーションなどの韻律的特徴は、情報に対する評価や好悪、喜び、驚き、不満など、さまざまな気持ちや感情といった心的態度も伝達する。そのため、音声コミュニケーションにおいて終助詞を適切に使うためには、終助詞のコミュニケーション機能とイントネーションの関係を理解し、産出することが必要である。これは日本語母語話者にとっては難しいことではないが、学習者にとってはその習得が難しい。

これまでの学習者を対象にした終助詞の習得に関する研究は、終助詞とそのコミュニケーション機能に関わる文法知識の習得に着目しており、終助詞のイントネーションの産出については検討されていない。終助詞は音声コミュニケーションにおいて発話意図や心的態度などのパラ言語情報を伝達する重要な役割を果たす。そのため、文法知識だけでなく、学習者が発話意図を伝達するために、終助詞のイントネーションをどのように産出するのかを検討する必要がある。また、

これまでの研究では日本で日本語を学ぶ第二言語環境の学習者が対象とされてきた。第二言語環境と比較すると、日本語のインプットがそれほど多くない外国語環境の学習者に関してはまだほとんど検討されていない。

2. 研究課題

以上のような背景を踏まえて、本研究は終助詞がパラ言語情報を伝達するという観点に立ち、学習者の終助詞のイントネーション産出について検討した。日本語学習年数が異なる外国語環境の学習者を対象に、終助詞のイントネーション産出能力をめぐって、3つの研究を行った。研究1では「ね」「よ」「よね」とそれぞれの機能によってイントネーション産出能力が異なるか、研究2では音声の学習リソースの使用と発音やイントネーションに注意する程度によって産出能力が異なるか、研究3では日本語母語話者に比べ、学習者が産出したイントネーションにはどのような音声的な特徴が見られるかを検討することにした。具体的な研究課題は以下の通りである。

研究1の課題

適切なイントネーションで終助詞の発話意図を伝達する能力は学習年数によって異なるか。

この課題を以下の2点に分けて検討する。

1. 「ね」「よ」「よね」で異なるか。
2. 「ね」「よ」「よね」の各機能で異なるか。

研究2の課題

1. 適切なイントネーションで終助詞の発話意図を伝達する能力は学習リソースの使用と関連するか。
2. 適切なイントネーションで終助詞の発話意図を伝達する能力は発音に対する意識と関連するか。

研究3の課題

1. 「ね」「よ」「よね」の各機能において、日本語母語話者が産出したイントネーションパターンにはどのような特徴や傾向が見られるか。

2. 「ね」「よ」「よね」の各機能において、JFL 学習者が産出したイントネーションパターンにはどのような特徴や傾向が見られるか。

3. 研究方法

調査協力者は中国の大学で日本語を専攻する学習者（中国語の標準語で発話する学習者、1年生9名、2年生22名、3年生13名；男性8名、女性36名）である。データ収集は終助詞の各機能に基づいて作成した27の会話文（終助詞3つ×機能3つ×場面3つ）を音読させる方法で行った。また、学習者の産出と比較分析をするために、10名の日本語母語話者から同様の会話文による音読データを収集した。

学習者の音読データに対し日本語母語話者による聴覚印象評価（0～4の5段階）を行い、イントネーションによる発話意図伝達の適切性を数値化した。また、学習者と母語話者の音読データを音声分析ソフトによってピッチ曲線として出力し可視化した。これら2つの方法でデータを分析し、学習者が産出した終助詞のイントネーションの適切性と音声的特徴について検討した。

4. 研究結果

3つの研究から以下のようなことが明らかになった。

研究1の結果

研究1では聴覚印象の評定値を用いて、イントネーションによる発話意図伝達の適切性が終助詞によって異なるか、また、終助詞の機能によって異なるか、学習者の学習年数を変数として検討した。

課題1として3つの終助詞の評定値を比較した。どの終助詞も学習年数が上がるにつれて、適切なイントネーションで会話文を音読できていたが、評定値がもっとも高い3年生の学習者であっても、「発話意図がまあまあ明確である」というレベルにしか達していなかった。3つの終助詞の中で「よ」「よね」より「ね」の評定値がもっとも低く、学習者にとって「ね」のイントネーションの産出が難しいことが示された。

課題2に関しては、終助詞の各機能の評定値を比較した結果、1年生から発話

意図を伝達できる意味機能もあれば、3年生になっても適切に伝達できない意味機能もあった。このことから、終助詞の意味機能によって、適切なイントネーションで発話意図を伝達する能力の発達パターンが異なることが示唆された。

また、「ね」と「よ」に関しては、聞き手に何らかの反応を求める機能が比較的難しいことが示されたことから、終助詞のイントネーションの産出の難しさは、終助詞の機能の上位カテゴリー（要求型・提示型・表明型）と関係すること、すなわち、終助詞のモダリティ機能と聞き手に働きかける発話連鎖効力が関連していることが示唆された。

研究2の結果

研究2では、音読データの収集と同時に実施したアンケート調査の項目の中から、授業時間以外の日本語の音声の学習リソース（アニメやテレビ番組など）の使用、および自身の発音やイントネーションに対する注意度のデータを使用した。このデータと研究1で使用した聴覚印象評価との関係を分析した。また、研究1で学習者のイントネーション産出能力が終助詞の機能型と関係する可能性があることが示唆されたため、分析の際は終助詞の種類と終助詞の機能型に着目して検討した。

分析の結果、音声による学習リソース使用に関しては、利用数が多ければ音読産出の評価も高いことが明らかになった。この結果から日本語の音声インプットがイントネーションの適切な産出に効果があることが示唆される。しかし、利用数が多い学習者であっても、発話意図が非常に明確というレベルには到達していなかった。このことから、学習者が自主的に音声インプットに触れていても、イントネーションによる発話意図の伝達能力の向上には限界があると考えられる。

一方、発話時の発音やイントネーションに注意する程度に関しては、対象者とした学習者の8割近くが高い注意度を示していたが、産出の評定値との間に統計的に有意な関係性は見られなかった。したがって、本研究の結果からは、発音に注意を払っても意図を明確に伝達できる能力が身につくとは言えない。しかし、言語習得、特に音声の習得には意識化が必要であることから、何らかの明示的な教育的介入が適切なイントネーションの習得に効果を示す可能性も考えられる。

研究 3 の結果

研究 3 では学習者と日本語母語話者の音読データを、音声分析ソフト Praat によって出力したピッチ曲線を用いて分析した。学習者の産出データは意図が明確であるデータと不明確であるデータに分け、それぞれ母語話者のデータと比較しながら、終助詞のパターン、持続時間、前接語のアクセント、文全体のピッチ変化量に着目し、音声的な特徴や傾向を検討した。

日本語母語話者のデータを分析した結果、「よね」の「共有の表明」には 3 種類のパターンが見られたが、それ以外の各機能においては 2 種類のイントネーションパターンが見られ、そのうちの一方が優勢パターンであった。これは調査材料の状況説明から読み取った発話意図、心的態度の理解に個人差があったからだと考えられる。

母語話者の産出データにおいては、上昇イントネーションは主に要求型、表明型の機能、下降イントネーションは主に提示型の機能に見られた。一般的に聞き手に情報の確認をする問いかけや注意喚起など、聞き手からの反応を求める場合には上昇イントネーション、聞き手の反応を求めない場合は下降イントネーション、または平調になるという。本研究からも聞き手の反応を求める発話場面で同じ傾向を示した。

各機能型で見ると、要求型機能においては、急上昇や急下降など、終助詞のピッチの変化量が大きいパターンを産出する傾向があった。これはこのようなパターンが聞き手に同意させるなどの意図を表しやすいからであろう。提示型機能においては、一般的に聞き手の知らない情報を提供するという発話意図を伝達するため、母語話者の産出からは聞き手の気持ちに配慮したイントネーションの産出が見られた。表明型は、自分の意見や気持ちを聞き手に表明するための機能であるが、会話を進行させる点から見ると、自分の意見や気持ちに対する聞き手の反応を導きやすい上昇イントネーションで産出する傾向が見られた。

学習者の産出に関しては、意図が「非常に明確」と評価されたデータは母語話者とイントネーションパターンが類似していた。「まあまあ明確」と評価されたデータも母語話者と類似したパターンであったが、前接語のアクセント核が不適切という問題点があった。このことから、終助詞の部分だけでなく、終助詞と隣接

する文節にアクセントが不自然であると、意図の伝達に影響を与えてしまうことが示唆される。また、意図が「非常に明確」という学習者であっても、終助詞のピッチ変化量が母語話者と比べて少なかった。このことから、コミュニケーションにおける聴覚印象はピッチの変化にある程度の許容範囲があると考えられる。

一方、意図が不明確と評定された学習者には、母語話者と異なるパターンで産出している、あるいは、ピッチの上昇または下降量が母語話者と比べて著しく小さい傾向が見られた。また、終助詞の持続時間、前接語のアクセント核、および文全体のピッチの変化にも問題が見られた。全体的にピッチの変化量が小さかったが、特に「ね」の要求型機能、「よ」の提示型機能においてその傾向が顕著であった。これらの機能において印象評価の評定値が低かったのは、ピッチの変化量に起因しているものと考えられる。

同じく評定値が低かった「よね」の表明型機能は、母語話者が上昇イントネーションを伴うパターンを産出しているのに対して、学習者のイントネーションはピッチの変化量が不足しているだけでなく、下降を伴っていた。母語話者は「よね」の「よ」の部分でイントネーションを下降させているが、学習者は「よ」の低いピッチを十分に表現できていなかった。また、「ね」は聞き手に反応を求める場合には上昇イントネーションを産出する必要があるが、評定値が低い学習者には下降イントネーションを伴うパターンが多く見られた。このような不適切なイントネーションパターンは意図が伝達されないと言える。

5. 結論

本研究は外国語環境で学ぶ日本語学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出を、聴覚印象と音声分析によって検討し、以上のような結果を得た。3つの研究を通して、1) 終助詞による発話意図の伝達能力の発達パターンは機能によって異なること、2) 発話意図の伝達能力と授業外での音声リソースの利用と関連があること、3) 聴覚印象評価が低い学習者の終助詞イントネーションには音声的な問題点があることを明らかにした。

本研究には以下のような意義や独自性があると考えられる。

まず、終助詞の音声面の習得に着目して調査したことである。これまでの終助

詞の習得に関する研究は、主に終助詞の文法的な関する知識の習得を明らかにすることを中心的な課題としている。しかし、終助詞は音声コミュニケーションにおいて多く使われ、その使用には話し手の発話意図や態度といった情報を適切に伝達することが必要である。本研究ではその点に焦点を当てて学習者の終助詞のイントネーション産出を検討した。

次に、研究課題を音声コミュニケーションにおけるパラ言語情報の伝達という枠組みで捉えたことも本研究の特色と言える。終助詞自体が話者の発話意図や心的態度を伝達するモダリティ機能を持つ言語形式であるが、その終助詞をパラ言語情報の伝達に重要な役割を果たすイントネーションと関連付けて研究を進めた。

また、機能が異なる3つの終助詞「ね」「よ」「よね」を同時に扱い、それらの終助詞の複数の機能を取り上げただけでなく、機能の上位カテゴリーとしての機能型（「要求型」、「提示型」、「表明型」）という観点からもデータを検討した。

そして、データの分析に当たって、2つの方法を用いたことも本研究の独自性である。まず、発話意図が明確に伝達できているかどうかという観点から聴覚印象評価を行い、その結果を量的に分析した。次に発話データを音声分析ソフトによりピッチ曲線を出力し、学習者のイントネーションパターンを類型化し、学習者のイントネーション産出の問題点を明らかにした。副次的成果として、母語話者の終助詞の機能別の産出上の特徴も明らかにした。

本研究の結果から以下のような教育的示唆が得られると思われる。まず、教室内での指導において、産出の難易度が高い終助詞や機能に関してはイントネーションのパターンを可視化して提示するなどの明示的な指導による教育的介入を行う必要があると考える。そのためには、中国での日本語教育の授業にどのように音声指導を取り入れるか、指導方法を工夫することが課題となる。また、発音の習得には音声インプットが必要不可欠であることから、授業外での学習において、学習者が自律的、かつ積極的に音声リソースを使用するように動機づけることが重要である。このように、学習者の発話意図伝達能力の向上のためには、授業内での指導と授業外での学習がともに重要である。したがって、この二つをどのように連携させるか、その方法について考えることが必要であろう。

6. 今後の課題

本研究には上述のような意義があると考え、調査方法に関して改善が必要な点がある。まず、学習年数を変数とした研究計画であったが、各学年の調査協力者数に偏りがあった。また、調査材料作成において可能な限り注意を払ったが、各会話文の長さの統制に不十分な点があった。これらのことが結果に影響している可能性もあるので、今後の調査においては改善が必要である。

本研究の今後の研究の方向性として、学習者の発話意図や心的態度を伝達する能力をどのように向上させられるか、教育的な視点と第二言語習得の視点から考えていきたい。教育的な視点に関しては、学習者の発話意図の伝達能力のための効果的な指導方法について検討する。第二言語習得の視点からは、考案した明示的な指導方法に効果があるかどうか音声習得に関する指導効果研究を行う。また、教室内外の学習を連携させることで、学習者の動機付けや学習ストラテジーにどのような影響があるか縦断的に検討する。このような課題に取り組み、第二言語教育研究、第二言語習得研究の両方に貢献していきたい。

論文審査結果の要旨

執筆者：論文審査委員

I 論文要旨

音声コミュニケーションにおいては、文字にできる言語情報以外に、発話意図や心的態度のようなパラ言語情報が音声を通して伝達される。このパラ言語情報は話し手が意図的に伝達するものであり、その伝達にはアクセントやイントネーションといった音声的特徴、また日本語特有のモダリティ表現である終助詞が深く関わっている。

終助詞は日本語のコミュニケーションにおいて多用されており、特に「ね」「よ」「よね」は使用頻度が高い。聞き手目当てのモダリティと呼ばれる終助詞は、複数のコミュニケーション機能を持ち、話し手のさまざまな発話意図や心的態度を表すが、機能によってイントネーションが異なる。そのため、終助詞によって適切に意図を伝達するためには、終助詞の各機能と適切なイントネーションの結びつきを理解し、産出することが必要となる。このような終助詞の使用は日本語母語話者にとっては困難なことではないが、日本語学習者にとっては難しい。

これまでに行われた日本語学習者の終助詞の習得研究は、主に終助詞の使用実態や誤用、終助詞の文法知識、終助詞のコミュニケーション機能の理解などに焦点を当てており、終助詞のイントネーション産出は検討されていない。音声コミュニケーションにおける終助詞の役割の重要性を考えると、学習者がどの程度適切なイントネーションによってパラ言語情報を伝達できるかを明らかにすることが必要である。しかし、終助詞ごと、機能ごとに学習者のイントネーション産出を検討する音声の習得研究は行われていない。また、これまでの終助詞の習得研究で対象となっているのはほとんどが第二言語環境で日本語を学ぶ学習者であり、母語話者とのインタラクションの機会がそれほど多くない外国語環境における学習者は対象とされていない。

以上のような研究背景を踏まえて、本研究では中国語を母語とする日本語学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」を含む文のイントネーション産出について探究し

た。海外で学ぶ日本語学習者はどのようなイントネーションで終助詞を産出するのか、学習が進むにつれて適切に産出できるようになるのか、適切なイントネーション産出は授業外での学習と関連があるのか、母語話者と比較して学習者のイントネーションパターンにはどのような特徴があるのかといった問題を明らかにすることを目的とし、3つの研究を行った。

調査協力者は中国の大学で日本語を専攻する学習者44名（1年生9名、2年生22名、3年生13名；男性8名、女性36名）、および日本語母語話者10名である。データ収集は終助詞「ね」「よ」「よね」を含む27の会話文（終助詞3つ×機能3つ×場面3つ）を音読させる方法で行った。収集した学習者の音声データは聴覚印象評価と音声分析ソフトで出力したピッチ曲線によってイントネーションの適切性、およびイントネーションの特徴を検討した。以下で研究ごとに結果を述べる。

■研究1

研究1では「適切なイントネーションで終助詞の発話意図を伝達する能力は学習年数によって異なるか」を研究課題として、学習者のイントネーション産出の聴覚印象評価を各終助詞の機能に焦点を当てて分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 学習年数が増えるにつれて、イントネーションの適切さも向上していたが、3年生の学習者であってもどの終助詞も高いレベルの評価ではなかった。また、3つの終助詞の中では、「ね」のイントネーションの産出が難しかった。
- 2) 終助詞の機能によって、適切なイントネーションで発話意図を伝達する能力の発達パターンが異なっていた。また、「ね」と「よ」に関しては要求型機能の産出の難易度が高かった。

■研究2

研究2では音声習得との関連が指摘されているインプットとの接触、および発音に対する意識が、どの程度イントネーション産出の適切さと関連があるかを検討した。研究1で各終助詞の機能の上位概念である機能型（要求型、提示型、表

明型)がイントネーション産出の難易度と関わっている可能性が示唆されたため、研究2では機能型の観点から聴覚印象評価を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 音声による学習リソースの利用数が多い学習者ほどイントネーション産出の聴覚印象評価が高かった。
- 2) 発音やイントネーションに対する注意度とイントネーション産出の評価には関係性が見られなかった。
- 3) 機能型に焦点を当てた分析では、「表明型」「提示型」「要求型」の順で評価が低く、聞き手からの反応を求める「要求型」の発話意図を伝達することが難しかった。

これらの結果から、音声インプットが適切なイントネーション産出に一定の効果があること、発音を意識するだけでは意図を明確に伝達できる能力は身に付かないこと、聞き手とのインタラクションに関わる機能のイントネーション産出が難しいことが示唆された。

■研究3

研究3では音読データを音声分析ソフト Praat によって出力したピッチ曲線を用いて、母語話者と学習者のイントネーションの特徴を分析した。終助詞のイントネーションパターン、持続時間、前接語のアクセント、文全体のピッチ変化量に着目し、音声的な特徴や傾向を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 各終助詞のどの機能においても母語話者には2種類のイントネーションパターンが見られ(「よね」の「共有の表明」のみ3種類)、そのうちの一方が優勢パターンであった。
- 2) 学習者の聴覚印象評価が高いデータは母語話者とイントネーションパターンが類似していたが、終助詞のピッチ変化量が母語話者と比べて少なかった。それよりやや評価が低いデータも母語話者と類似したパターンであったが、前接語のアクセント核の不適切さが見られた。
- 3) 発話意図が不明確と評価された学習者のデータは、母語話者と異なるパターン

で産出している、あるいは、ピッチの上昇または下降量が母語話者と比べて著しく小さい傾向が見られた。また、終助詞の持続時間、前接語のアクセント核、および文全体のピッチの変化にも問題が見られた。

これらの結果から、発話意図の伝達の成否にはイントネーションパターン、終助詞部分、および文全体のピッチ変化量、前接語のアクセントの適切性など、複数の要因が関わっていることが示唆された。

本研究は外国語環境で学ぶ日本語学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出を、聴覚印象と音声分析によって検討し、以上のような結果を得た。3つの研究を通して、まず、終助詞による発話意図の伝達能力の発達パターンが機能によって異なることを明らかにした。また、発話意図の伝達能力と授業外での音声リソースの利用と関連があることを示した。さらに、聴覚印象評価と音声分析を照らし合わせて分析することによって、学習者の終助詞イントネーションの音声的な問題点を明らかにした。このように本研究は未解明であった学習者の終助詞のイントネーション産出に関して複数の研究成果を得ることで、学習者のパラ言語情報の伝達能力という新奇性のある研究分野を開拓できた。

なお、本研究に関連する研究業績として以下の論文がある。

- ・鄭穎 (2020) 「終助詞のコミュニケーション機能の分類と日本語学習者を対象にした終助詞に関する研究概観」『Global studies』 4, 93-112.
- ・鄭穎 (2020) 「中国語を母語とする日本語学習者のイントネーションによる発話意図の伝達—終助詞「よ」「ね」「よね」に焦点を当てて—」『第二言語としての日本語の習得研究』 23, 44-61.
- ・鄭穎 (2021) 「学習リソースの使用とイントネーション産出の関係—中国人学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」の音読を中心に—」『Global Studies』 5, 73-90.
- ・鄭穎 (2022) 「日本語母語話者と日本語学習者の終助詞「ね」のイントネーション産出」『日本語音声コミュニケーション』 10, 1-20.

II 審査結果

審査委員：主査	欒 殿武（武蔵野大学）
副査	向山 陽子（武蔵野大学）
副査	岩田 夏穂（武蔵野大学）
副査	横山 紀子（元昭和女子大学）

本論文の公聴会、および最終審査が令和5年1月31日（火）15時30分より行われた。審査委員は上記4名であった。本研究を評価する点として以下のことが挙げられた。

- 1) 終助詞「ね」「よ」「よね」に関してはすでに多くの研究が行われているが、これまでに扱われていない終助詞のイントネーションに着目した点は本研究のオリジナリティである。
イントネーションはコミュニケーションに関わる重要な要素である。本研究は学習者の終助詞のイントネーション産出を音声学的に分析した点が新しく、高く評価できる。
- 2) 終助詞は日本語に特徴的な文法要素であり研究が難しい。本研究はそのような終助詞3種類を対象として音声的な観点から検討した初めての研究である。特に聴覚印象と音声の両面から検討したことは意欲的であり、意義のある研究だと評価できる。
- 3) 第一次審査、第二次審査での指摘を受けて、修正が適切に行われた。特にパラ言語情報として伝達される「発話意図」と「心的態度」の説明が明確に記述され、分かりやすくなった。
- 4) 本研究は、学習者の終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出をテーマとしているが、インタラクションに関連する研究と捉えることができるスケールの大きい研究である。イントネーションは教育において優先順位が低いですが、それを扱った点も評価できる。
- 5) 本研究は習得研究として位置づけられるものであるが、学習者の終助詞習得だ

けでなく、音声コミュニケーションにおける情報伝達、日本語のモダリティ、終助詞の機能分類など、様々な理論的背景に基づいている。それらを論文としてまとめたことは大きな挑戦であり、高く評価できる。

本研究に対して以上のような評価があった一方、今後への期待も含めて、課題として以下の点が指摘された。

- 1) 研究2において終助詞の「機能型」に着目して分析しているが、なぜ機能型に関する分析が必要なのか、研究1からの論述の流れがやや説得力に欠ける。
- 2) 本研究の知見を基にどのような音声教育を行うのか、その点に対する考察を深める必要がある。中国における日本語教育現場で音声教育があまり行われていないことを踏まえると、終助詞に特化した教育は現実的ではない。「精読」などの科目の中で、どのように終助詞のイントネーションを指導していくのかを考えることが重要である。
- 3) 研究2で授業外での自主的な学習の影響が示された。これからの教師は授業内での指導だけでなく、授業外の学習も含めてプロデュースすることが求められる。本研究の知見を今後の日本語教育に活かしていくことが大切である。

以上のコメントに基づき、さらに論文に加筆修正を行い、その修正稿を主査と指導教員に提出した。両名の最終確認を受けたうえで、博士論文最終版を武蔵野大学に提出した。

以上